そのうちに、私に、伏見のあるお医者様から婿に来ないかというお誘いが来た。ずいぶん裕福な家だという話だった。

おっ母さま まだしんどいんやから ええ子にしてろよ 信太坊

はい せんせ

ありがとうございました

すみません 伊平さん

ハイッ ただいま お茶

なあに

父の生活も苦しかったし、私も忙しい毎日をなんとかやりくりしている状態だった。それに上京して薬屋を開業する計画があったので、紫野家にしてみれば、まさに「助け船」といってもよかった。

うちの かかあが世話になっとるお礼じゃ

本家の剣岳おじさまは賛成してくださった。父は、兄に相談しろというので、江戸の兄に、京都での開業の相談もかねて婿入りを承知しようと思っていることを手紙で知らせた。

お芋ですっ
小輔！
ポンッ
兄からの返事は思った以上にきびしい文面だった。「いくら貧しい生活をしても他人の家の財産をあてにするようなまねはするものではない」と。
「親孝行をするならばお前が薬を売り、私は辻講釈をしてでも兄弟ふたりの力で、父を助けるべきだ」と。
伏見からの婿入りのお話ことわることにした
そうか
手紙で兄さんにえらい叱られてしもうた
そうか

父さまっ
畑仕事 残ってるなら
手伝おうかっ
それだけ
畑が残っとる
とありがたい
けどなあ
お前達の学費に
ばけてしもうたあ～
うはっ
はっはっ
いも
ふかすから
食べようかっ

兄は牟礼から遠くはなれてまだ仕官が決まらず不安定な生活がつづく。それなのに、私が父を残して他家の後つぎになったら誰が親孝行をするのかと。

兄の父への愛情が手にとるようにわかる。兄のつらさも、あせりも、痛いほどわかる。兄が、私に期待し、たくすることを受けとめるのが当然なのかもしれないけれど…
こんなにそばに居て充分な援助もできずに、日々年老いてゆく父の姿を見ているというのはたまらない。
たまらないよ、兄ちゃん。

明和二(一七六五)年の十月、国学を学ぶため兄は京都へ行った。芝山先生の恩師でもある高橋図南先生の塾で勉強をつづけていた。
どうや柴野君 京都の冬はようひえるやろう
そいでもって また 今日は かくべつ
そりゃあ 兄さんが 障子をあけつばなしてるからやっ
そんは言えるな
おやっ そうかいな

あんな兄はほうっておいて図南先生のところへ行きましょう
こおら 成章！天下の皆川淇園をあんなとはなんだっ あんなとはっっ
そうしましょ

国学というのは、日本のむかしからの生活や精神を明らかにしようとする学問なのだそうだ。

「万葉集」や「源氏物語」「古事記」など日本の古い書物を研究したり、また、天皇家の歴史、朝廷での儀礼・典礼を研究するのだそうだ。

京都でも兄はその熱心さで研究し、勉強した。共に図南先生に学んでいた皆川淇園様とは考え方も意見も(性格も)全くちがっていたけれど、だいの親友になった。

なあ

研究するのは ええけど 根のつめすぎは 身体に毒やで

ほれ 茶だっ

ゴン

もともと君は身体が丈夫やないから健康には気つけてるはずやろ!?

調子悪くなるときは 自分でわかるやろうに

もうちょっと自分を大事にしてやらんといかんぞ

ポン

そんなことはわかってる

だからって自分を甘やかしてちゃいかん

だって私30歳すぎちゃったし

自分に勝てなきゃ何もできん

えらい鼻いきやな

くるるるきゅうん〜

金が入ったらぜーんぶ本を買うのにつこうてしまうんやさかいっ

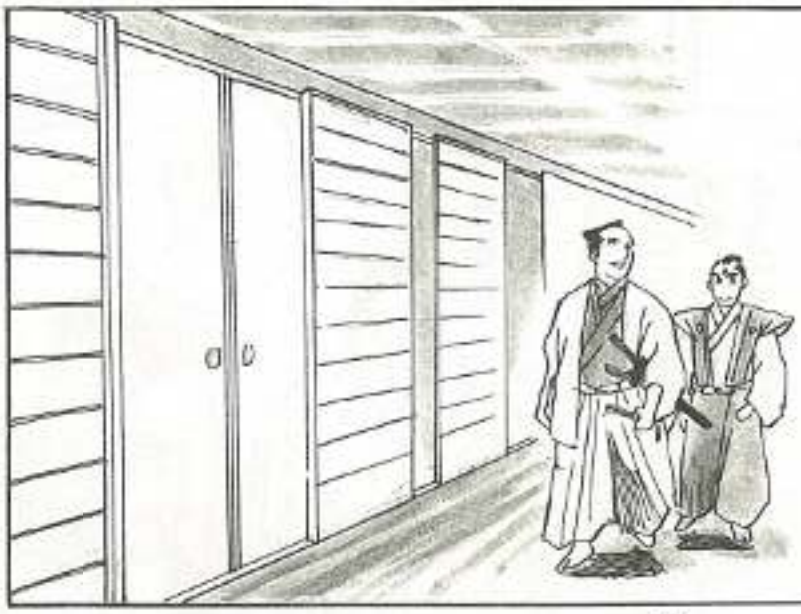
草なんか喰うたりする奴ら寝込んでしまうのやっ

どーしても欲しかったんですっと前からあず

お呼びですか 先生
合田様っ
やあっ
おお柴野君 合田殿が 吉報をもってきてくださったよ
淇園様のご縁で、阿波藩儒官の合田様を通して、兄に阿波藩への仕官の話が入っていて、明和四（一七六七）年の春にその仕官が決まった。
おやっさんっ
ポリ
八月二十三日、兄は阿波藩儒官になった。十月二十四日京都を出て阿波に入った。
ふっ 30歳にしてたつ
きっ 琴だけど
やったよ父様
本ばかり買うちゃだめですよ
借金かえせよ
パシッ
はじめの二・三年間は徳島でお城づとめということだったのだけれど半年後、さっそく江戸づめになって阿波をたった。

江戸で蜂須賀様に謁見―これから兄はお殿様に仕えて、ふたりの若君様に学問をお教えすることになる。
ようこそ来てくれた
阿波に急ぎの用事のないときは主の好きにするとええ
そのかわり 大事のときは どこにおっても阿波にかけつけてくれよ 頼りにしている
はっ
勝手を申しますっ
讃岐の頼恭殿には気の毒じゃったが
合田営治はええ人材をつれてきてくれたくすっ

禄百五十石での御奉公は、研究費が足りないうえ、借金だらけの兄にはちょっとつらいものがあったろうけど、江戸での自由は魅力的だったろう。



それに、仕官の地が父に近いことが、兄の気持ちを落ちつかせるのかもしれない。

翌年の春、兄が久しぶりに牟礼に帰ってきた。六年くらい前に帰ってきて以来だ。そう、この時だって、近づいてくる兄の姿をまっさきに見つけたのは私だ。
兄さん
仕官が決まっての帰省だったから、兄の顔は晴ればれとしていた。この後牟礼を出てから京都・名古屋によって江戸に帰ったという。まったく、よく歩く。
仕官おめでとう兄さん
うん
これからやな！
父さま えらいやせてしもたな…
ぼくらが父さまの肉を そいでしもうたようなもんやね
それに野口のおばあさまや おじさまの気までもませとる